

日中両言語における有情物の空間描写の事態把握について*

A Study on the Construal of Spatial Expressions of Animate Objects in Japanese and Chinese

洪 安瀾 蘇 秋韻
HONG Anlan SU Qiuyun

内容提要: 关于语言主观性 (subjectivity) 以及说话人识解 (construal) 的研究成果丰硕, 研究多集中精力讨论以下两方面的问题: 其一是主观·客观识解的对立, 其二是说话人视点设定的差异。但是, 目前的研究多以描述人物运动的陈述句为研究对象, 相关成果难以用于解释描述静态空间关系的句子。为此, 本研究邀请了中日 258 名受试者参加了一次问卷调查, 探究中日两国母语者在空间认知上的差异。

キーワード: 日中対照 心理空間 有情物 視点 定量分析

目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 問題設定および分析
4. おわりに

1. はじめに

主観・客観的な把握 (Langacker1990、沈家煊2001、池上2011,2015、鈴木2020 など) に関する研究では、日本語話者は「事態内視点/主観的把握」、中国語話者は「事態外視点/客観的把握」の捉え方で事態把握する傾向にあると指摘している。しかし、無情物の位置を紹介する際に、日本語話者が観察対象と共感しないのに対して、中国語話者はいかなる場面でも事態内に自己投入して「事態内視点」の構図で事態を把握できるということを調査によって明らかにした (洪 2022)。本研究では 258 名の参加者を対象にアンケート調査を行い、有情物の方向域を紹介する際に、日中両言語の事態把握の仕方を考察した。調査の結果は、日中両言語の「空間」には、それぞれ異なる性質があることを示唆している。

2. 先行研究

* 本研究は福建省社会科学基金項目《基于定量分析的汉日空间识解范式比较研究 (FJ2022C033)》、《汉日空间移动的认知图式差异研究 (FJ2023X005)》の助成を受けたものです。

2.1 視点と事態把握

視点 (View point/Perspective) に関する研究では、視点は観点を含む広義の意味で言及されることが多い(辻 2013:150)。辞書でも「視点」が「視線が注がれるところ」と「事物を見たり考えたりする立場、観点、」という二つの意味がある。ほかにも“視点”、“視角”、“焦点”、“視野”などの混乱しやすい類語も存在する。ここでは、視点に係わる諸研究を整理する。

I. 観察者の在り処 (観察者自身) を視点にする研究 :

方经民 (1987,1999,2002) “観察点/心理視点”、“客視/主視”

申小龙 (1988) “焦点视语言/散点视语言”

Langacker (2013)、Talmy (2017)、宗守云 (2021) 的“視角位置 (View point)”

II. 当事者の立場に視点を置く研究 (当事者と物語全体との関係) :

大江三郎 (1975) 「視線の軸」

久野 暲 (1978) 「カメラ・アングル、共感 (Empathy) 度」

前田彰一 (1996) 「背後からの視点、ともにある視点、内側から視の点」

熊沐清 (2001)、唐淑华 (2021) “观念视点、时空视点、叙述视点、知觉视点”

III. 観察者の視角をメンにする研究 (観察者と観察対象との関係):

森田良行 (1998) 「自分を取り巻く対象把握/自己を離れて世の中を把握する」

甘露統子 (2004,2005) 「語り視点/報告視点」

金谷武洋 (2004,2012) 「神の視点/虫の視点」

彭 广陆 (2008,2016,2022) “视点移动型语言/视点固定型语言”

上田 裕 (2016) 「傍観者俯瞰型視点/当事者現場立脚型視点」

IV. 焦点、着眼点に関する研究 (参照物と観察対象との関係):

高橋 弥守彦 (2017,2020) 「話題視点/事実視点」

本稿における視点は主に観察者の心理視点であり、場合によっては当事者、又は話者の立場でもある。主観・客観的な把握の説では、どの言語の話者であっても、一つの事態をいくつかの違ったスタンスで把握できるという観点を支持している。つまり、視点は一ヶ所に留まらず、移動できるということが分かった。便宜上、方经民 (1987) にならい、本稿では観察者 (主体) の方に視点を置き、客観的に事態を把握する事態外視点を「主視」と、観察対象 (客体) の方に視点を据え (自己投入)、主観的に事態を把握する事態内視点を「客視」と呼ぶ。

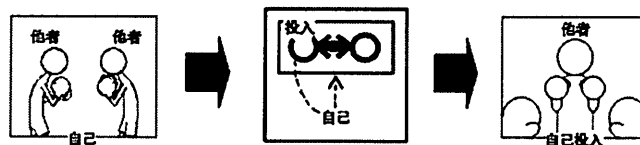


図1 「主視」と「客視」

2.2 空間区域と空間指示枠

空間区域は図2のように“方位域”、“地点域”に分かれ、前者をさらに“方向域”、“位置域”に分けられる(方经民 2002,2004)。さらに参照物の違いによって、絶対方向は“自身参照”、“全体参照”の2種類があり、相対方向は“外物参照”がある(方经民 1987,1999)。(本稿では「自己参照」「全体参照」「他者参照」と訳す)

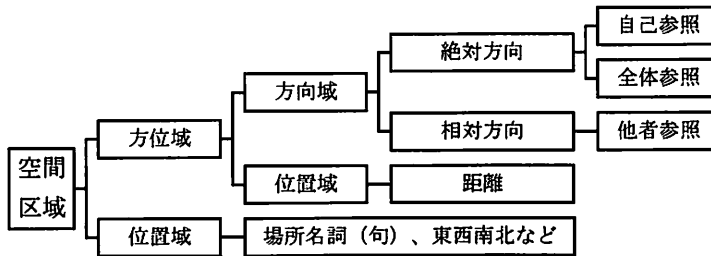


図2 空間区域の分類(方经民 1987, 1999, 2002, 2004)

空位置を説明する空間指示枠(Relative FoR)は、視点(viewpoint)、参照物(ground/relatum)、観察対象(figure/referent)から構成される(辻 2013:77)。この説に従って、「自己参照」、「全体参照」が「内在的指示枠」に、「他者参照」が「相対的指示枠」に該当する。

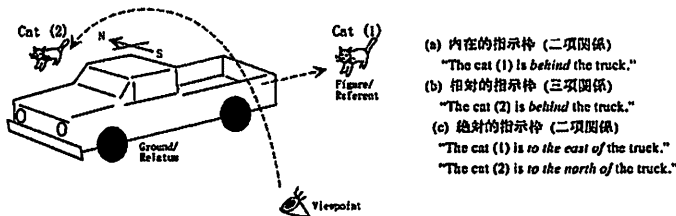


図3 内在的・相対的・絶対的指示枠の事例(辻 2013:77)

本稿は主に方向域を紹介する例文を対象とする。観察者(視点)が観察対象の方向域を紹介する際、常に既知の参照物から説明を展開する。参照物が暗黙知とされ、それを意味する名詞句が文中にこない(例えば例 1e、1fの無標)場合が多く見受けられる。例えば、下記の画像を提示し、お医者さんと患者さんの位置を説明してもらうと、以下のように4種類の「構図」が考えられる。



図4 お医者さんと患者さん

- (1) a. 患者在 我的左边。→①客視+自己参照 <主客合一>
- b. 患者在医生的左边。→①客視+自己参照 <主客合一>
- c. 患者在医生的右边。→②主視+他者参照 <主客对立>
- d. 患者在画面的右边。→③主視+全体参照 <主客对立>
- e. 右边 是患者。→③主視+全体参照 <主客对立>
- f. 患者在 右边。

→③主視+全体参照/②主視+他者参照/①主視+自己参照 (作例)

上記例文では③→②→①→①の順に事態把握の主観性が高くなる。また、例(1f)では、3種類の構図で解釈できるが、今回のアンケートの回答としては、「③主視+全体参照」の構図が観察条件と一致し、最も効率が高いので、このような例文を「③」の構図として統計する。

3. 問題設定および分析

3.1 参加者と問題設定と統計データ

アンケート調査の参加者には、日本語話者116名、中国語話者142名、延べ258名がいた。参加者情報は下記の通りである。

表1 参加者のご出身(人数多い順)

中国語話者:	华南、东北、西南、华中、华东、西北、华北
日本語話者:	関東、関西、中部、中国、東北、九州

表2 参加者の性別

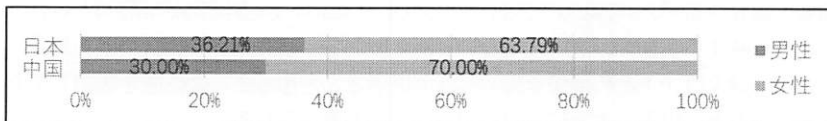


表3 右利き/左利き

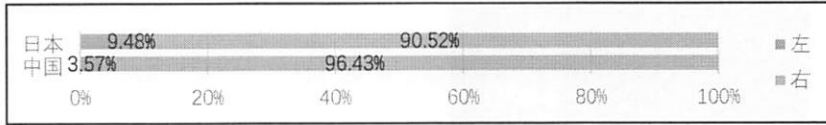




表4 参加者の最終学歴

	小学校	中学校	高校など	専門学校	大学	大学院
中国	0.00%	23.28%	6.90%	0.00%	67.24%	2.59%
日本	0.00%	0.71%	8.57%	1.43%	72.86%	16.43%

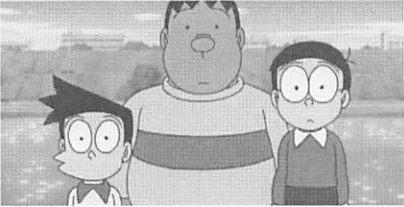
アンケートには計6問があり、下記の6枚の写真を提示して、参加者に写真に写っている事物・人物の様子や位置を説明してもらった。1問から5問は、回答をする前に、写真に写っている出来事に対する知悉度も考察した。




Q1-首脳会談



Q2-ハリー・ポッター



Q3-ドラえもん



Q4-ちびまる子ちゃん



図5 アンケート調査に提示した写真

問題1、2にはリアルな人間の写真を提示した。問題3、4には能動性(volitionality)のやや低い漫画人物の写真を提示した。問題5、6には人間よりさらに能動性の乏しいロボットと動物たちの写真を提示した。下記の表5で示すように、日本語話者116名と日本語話者142名の回答から有効例を選出した後、方向域を話題する例文の数を数えた。最後に、視点と参照物のタイプを統計してから、それと能動性と知悉度との関連性を分析した。

表5 知悉度及び視点と参照物のタイプについて

	Q1 首脳会談		Q2 ラリー・ボッタ		Q3 ド・ラモン		Q4 まる子		Q5 スターウォーズ		Q6 動物たち		
	JP	CN	JP	CN	JP	CN	JP	CN	JP	CN	JP	CN	
有効例	107	129	108	129	110	133	106	127	103	117	104	125	
方向域	52	94	70	99	59	94	49	78	54	79	62	87	
	48.6%	72.9%	64.8%	76.7%	53.6%	70.6%	46.2%	61.4%	52.4%	67.5%	59.6%	69.6%	
知悉度	詳しい	0	2	51	76	54	90	42	62	28	7	Q6に提示された図は筆者が作成したもののゆえ、「見慣れない」サンプルとする。	
		0.0%	2.1%	72.9%	76.8%	91.5%	95.7%	85.7%	79.5%	51.9%	8.9%		
	印象がある	4	2	17	18	4	2	7	11	20	8		
		7.7%	2.1%	24.3%	18.2%	6.8%	2.1%	14.3%	14.1%	37.0%	10.1%		
	印象が薄い	12	20	1	4	1	2	0	4	2	11		
		23.1%	21.3%	1.4%	4.0%	1.7%	2.1%	0.0%	5.1%	3.7%	13.9%		
見慣れない	36	69	1	1	0	0	0	1	4	53			
	69.2%	73.4%	1.4%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%	7.4%	67.1%			
視点のタイプ	主視	52	92	70	97	59	93	49	75	54	77	61	86
		100%	97.9%	100%	98.0%	100%	98.9%	100%	96.2%	100%	97.5%	98.4%	98.9%
客視	2	6	3	7	1	4	1	6	0	2	2	2	
	3.8%	6.4%	4.3%	7.1%	1.7%	4.3%	2.0%	7.7%	0.0%	2.5%	3.2%	2.3%	
視点転換	2	4	3	5	1	3	1	3	0	0	1	1	
	3.8%	4.3%	4.3%	5.1%	1.7%	3.2%	2.0%	3.8%	0.0%	0.0%	1.6%	1.1%	
参照物のタイプ	全体	52	87	70	91	56	88	49	71	54	74	60	79
		100%	92.6%	100%	91.9%	94.9%	93.6%	100%	91.0%	100%	93.7%	96.8%	90.8%
	他者	2	12	10	13	3	9	2	8	1	5	1	11
		3.8%	12.8%	14.3%	13.1%	5.1%	9.6%	4.1%	10.3%	1.9%	6.3%	1.6%	12.6%
	自己	1	3	3	7	1	4	1	6	0	2	2	2
		1.9%	3.2%	4.3%	7.1%	1.7%	4.3%	2.0%	7.7%	0.0%	2.5%	3.2%	2.3%
参照物のタイプの切替	7	8	11	12	2	7	3	7	1	2	1	4	
	13.5%	8.5%	15.7%	12.1%	3.4%	7.4%	6.1%	9.0%	1.9%	2.5%	1.6%	4.6%	

※「視点のタイプ」「参照物のタイプ」には、重なる部分がある。

表6 視点転換による構図の変化

		構図の変化	例文数	
Q1 首脳会談	JP	③主視+全体参照→①客視+自己参照	2例	3.8%
	CN	③主視+全体参照→①客視+自己参照	4例	4.3%
Q2 ハリボツ	JP	③主視+全体参照→①客視+自己参照 1例 ③主視+全体参照→②主視+他者参照→①客視+自己参照 2例	3例	4.3%
	CN	③主視+全体参照→①客視+自己参照	5例	5.1%
Q3 ドローン	JP	③主視+全体参照→①客視+自己参照	1例	1.7%
	CN	③主視+全体参照→①客視+自己参照	3例	3.2%
Q4 まる子	JP	③主視+全体参照→①客視+自己参照	1例	2.0%
	CN	③主視+全体参照→①客視+自己参照	3例	3.8%
Q5 スターウォーズ	JP		0例	0.0%
	CN		0例	0.0%
Q6 動物たち	JP	③主視+全体参照→①客視+自己参照	1例	1.6%
	CN	③主視+全体参照→①客視+自己参照	1例	1.1%

表5と表6で示すように、有情物の方向域を説明する際に、観察対象の能動性と知悉度と関係なく、「③主視+全体参照」の構図で作る例文が最も多く、日中両言語のサンプルの9割以上を占めている。全体的には、能動性に際立つ観察対象ほど、「視点転換」、「参照物のタイプの切替」、および「構図の変化」の頻度が高い。ほかにも、機械扱いされた「スターウォーズ」のロボットを除いて、日本語話者より中国語話者が<主客合一>の主観的把握構図を選ぶ割合が高いことも明らかになった。また、観察対象に対する知悉度は話題の選択（位置の報告なのか、有り様の描写なのか）と直接に関わっていると考えられるので、本稿では展開しないとする。

3.2 整理と分析

一般論では、日本語話者が客観的把握で事態を捉え、自分自身が臨場しているのではない事態の中に自分自身を心理的に投入して、あたかも事態を体験しているかの如く主観的把握構図で事態を把握する傾向が顕著に思われる（池上2011:320）。多くの研究がその有効性を支持ものと思われる（甘露2004、金谷2004、伊藤2016など）。日中両言語の事態把握について、鈴木（2020）では中国語が「場面外視点」から「自己投入」、日本語が「場内内視点」から「共感体験」を通じて事態把握する傾向があると指摘している。ただし、それらの研究はいずれも有情物の運動・移動など

を表す文を対象にしているので、場面描写に用いられる文を説明するには、なお不十分なところがある。先行研究で説明したように、洪 (2022) では無情物の位置 (方向域) を紹介する際に、日本語話者が観察対象と共感しないのに対して、中国語話者は事態内に自己投入して「事態内視点」の構図で事態を把握できるということが調査によって明らかになった。本稿の調査結果では、有情物の位置 (方向域) を説明する際に、日中両言語が「事態内視点」の構図をとることができるが、中国語話者の使用頻度がより高いことを判明した。すなわち、動的・静的な観察対象を捉える際に、各々の注目点がある。

それは「空間」に対する日中両言語の捉え方の差よるものと考えられる。欧米では、空間をあるがままの三次元の空間として認め、透視画などの手法で、視知覚像と同じものを平面に投影することに関心が向く (黒田 1983、巫鴻 2018)。日本語話者が自己自身を「下位者」として、自己を取り巻く外部世界と他人を直視できず、受動的に変化を受け止める (森田 2006:222-233) という説明のように、日本人の心理空間を二重丸構造の球形のように描くことができよう。一方、中国人の心理空間は山水画に見られる“重屏构图”、又は絹本絵画に応用される“镜像构图”のような構造を持っているのであろう。

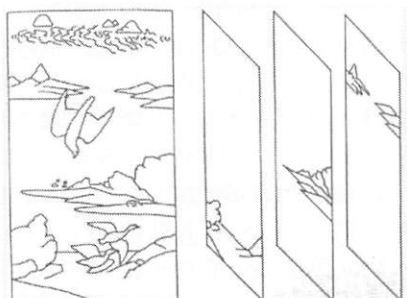


図6 唐・山水画の“重屏构图” (巫鴻 2018)

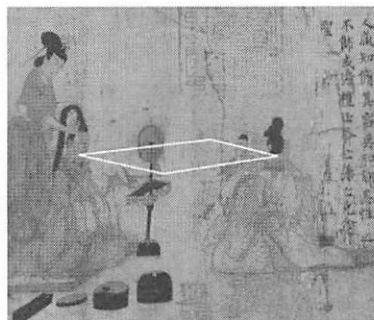


図7 東晋・絹本絵画《女史箴图》の“镜像构图” (巫鴻 2018)

平面に反映された三次元(事態外視点)、そして自己を取り巻く球形(事態内視点)、この2種類の構図では、観察者が事態の原点として、一つの空間指示枠で観察者、参照物、観察対象の在りかを示すことができる。それは連続する「空間」である。“重屏構図(事態外視点/自己投入)”と“鏡像構図(分身+自己投入)”との構図では、観察者がリアルな空間に縛られず、思う存分に心理空間を往来することができる。それは離散的な「空間」である。

本研究のサンプルにも同じ構図の例文がある。例(2)の“苏格拉底在中间”は「③主視+全体参照」の構図で、事態外視点で事態をとらえている。“右侧是卢拉, 左侧是巴罗佐”は「①客視+自己参照」の構図で、“苏格拉底”の位置に自己投入して、事態を内部から把握している。日本語では、能動性の際立つ対象にのみ、自己投入することができる。

(2) 苏格拉底在中间, 右侧是卢拉, 左侧是巴罗佐。(Q1-CN-57)

(3) 写真中央のソクラテスから見て右手側にはルーラが、左手側にはバローゾがおり、3人ともカメラに向かって笑顔で握手を交わしている。(Q1-JP-73)

同じく哈爾濱市出身の57番中国語参加者の例文であるが、例(4)では観察者が自己分裂して、分身を画面の右側に投入して、動物たちの進行方向の前に立っているかのように、出来事を事態内視点で把握している。

(4) 狮子排在前面, 后面是长颈鹿和熊猫。(Q6-CN-57)

しかし、離散的な心理空間を表す例文には、「右端」「向かって左」など複雑な空間名詞句が見当たらない。異なる“重屏”に点在する参照物の間に連携が弱いので、一気にいくつかの参照物も選ぶなら、お互いに理解の邪魔をするかもしれない。ほかにも、「視点転換」と「参照物のタイプの切替」(表5)との頻度は、中国語話者が日本語話者より高いのも、離散的な心理空間によるものである。

(5) 2人の男の子が左と真ん中にいて, 右端に女の子が1人いる。(Q2-JP-72)

(6) 向かって左のスネ夫、中央のジャイアン、右ののび太が呆然としている。(Q3-JP-10)

4. おわりに

本稿は先行研究を踏まえ、日中両国計258名の参加者を対象にアンケート調査を行い、有情物の方向域の事態把握について考察した。無情物の方向域を紹介する際に、日本語話者は事態内視点から事態を把握しないが、しかし、中国語話者は主観的・客観的把握の2通りの構図で事態を捉えることができる(洪2022)。有情物の方向域を紹介する場合は、日本語話者は能動性の際立つ観察対象と共感できるが、中国語話者は多様な観察対象と共感できる。「空間」に対する日中両言語の捉え方の差が存在するので、事態把握の好みに言語それぞれの傾向が生じたと考えられる。

資 料

黒田正巳. 空間描写絵画と透視画[J]. 国学研究, 16(1), 1982:13-19.

巫鴻. “空間” 的美術史[M]. 上海: 上海人民出版社, 2018.

参考文献

Langacker, R. W. Subjectification[J]. *Cognitive Linguistics* 1, 1990.

池上嘉彦. 特集: <いま> と <ここ> の言語学: ことばの <主観性> をめぐって[J]. 言語, 2006, 35(5): 20-27.

———. 日本語話者における「好まれる言い回し」としての「主観的把握」[J]. 人工知能学会(編) 人工知能学会誌, 2011a, 26(4): 317-322.

———. 日本語と主観性・主体性[A]. ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性[C]. 東京: ひつじ書房, 2011b.

伊藤創. 日本語・中国語・英語母語話者における事態参与者焦点化の決定要因の差異[J]. 関西国際大学研究紀要, 2016, (17): 11-22.

上田裕. 視点の取り方から見た名詞一語文と存在文の成立条件: 発見の状況を中心に[J]. 中国語学, 2016, (263): 82-98.

大江三郎. 日英語の比較研究—主観性をめぐって[M]. 東京: 南雲堂, 1975.

金谷武洋. 神の言葉となった英語[M]. 東京: 講談社, 2004.

———. 幻想としての『省略』: 日仏対象研究と日本語教育[J]. 日本語・日本語研究, 2012, (2): 73-81.

甘露統子. 人称制限と視点言語と文化, 2004, (5): 87-104.

———. 「語り」の構造[J]. 言葉と文化, 2005, (6): 103-120.

久野暉. 談話の文法[M]. 東京: 大修館書店, 1978.

鈴木ひろみ. 「場面外視点」と「場面内視点」から見る中国語と日本語[J]. 漢日語言対比研究論叢, 2020, (00): 275-286.

高橋弥守彦. 中日翻译学的基础与构想: 从共生到共创[M]. 北京: 外语教学与研究出版社, 2020.

辻幸夫. 新編認知言語学キーワード事[Z]. 東京: 研究社, 2013.

前田彰一. 物語の方法論: 言葉と語りの意味論的考察[M]. 東京: 多賀出版, 1996.

森田良行. 日本語の視点: ことばを創る日本人の発想[M]. 東京: 創拓社, 1995.

———. 日本人の発想、日本語の表現: 「私」の立場がことばを決める[M]. 東京: 中央公論社, 1998.

———. 話者の視点を作る日本語[M]. 東京: ひつじ書房, 2006.

- 方经民.汉语“左”“右”方位参照中的主视和客视:兼与游顺钊先生讨论[J].语言教学与研究,1987,(03):52-60+154.
- .论汉语空间方位参照认知过程中的基本策略[J].中国语文,1999,(1):12-20.
- .论汉语空间区域范畴的性质和类型[J].世界汉语教学,2002,(3):37-48.
- .地点域/方位域对立和汉语句法分析[J].语言科学,2004,(06):27-41.
- 洪安澜.日中両言語における空間認識:アンケート調査に基づく事態把握の一考察[J].東アジア国際言語研究,2022,(3):66-77.
- 刘宁生.汉语怎样表达物体的空间关系[J].中国语文,199,(3):169-179.
- 彭广陆.从翻译看日汉移动动词「来る/行く」和“来/去”的差异:以译者观察事物的角度[J].日语学习与研究,2008,(4):7-14.
- .名詞の語彙的な意味における「視点」のあり方:中日両語の比較を中心に[J].大東文化大学大学院外国語学研究科(編)外国語学研究,2016,(17):21-33.
- .关于日汉语言认知模式的一个考察:以“出入”与“内外”的关系为例[J].东北亚外语研究,2020,(4):14-28.
- .視点から見た所在の訊ね方:日中対照を中心に[R].東アジア国際言語学会第9回大会,2022.
- 申小龙.论汉语句子的心理视点[J].语言教学与研究,1988(01):12-31.
- 沈家煊.语言的“主观性”和“主观化”[J].外语教学与研究,2001,(4):268-275.
- 唐淑华.论话语视点的“视点”[J].外语教学与研究,2021,(2):188-200.
- 宗守云.视角框架及其对语言运用的影响[J].汉语学报,2021,(03):12-21.